

北海道ヒストリア

2026.06.22

- #鉄道
- #歴史・文化
- #美瑛駅
- #十勝岳
- #上富良野町
- #美瑛町
- #丘のまち郷土学館「美宙」
- #十勝岳ジオパーク

十勝岳と生きる

―― 泥流からの復興100年【中編】

波打つ丘、作物の種類によって色分けされたパッチワークのような畑…。

美しい田園風景から想像するのは難しいが、
上富良野（かみふらの）町と美瑛（びえい）町は、
100年前に起きた十勝岳（とちだけ）噴火による泥流（でりゅう）の被災地である。
苦難を乗り越えて復興した地に、ランペダーが咲き、「白金（しろがね）青い池」が輝く。
悠久の歴史の中で絡み合う火山と人の物語をたどってみよう。

文：北室かず子/写真：田淵立幸

消えた大カルデラ

「波打つ丘の地形を生んだのは大昔の大噴火です」。十勝岳ジオパーク推進協議会事務局長の長野克哉（ながの かつや）さんの言葉の謎を探るべく、十勝岳ジオパークの拠点施設「丘のまち郷土学館「美宙（みそら）」を訪ねた。



水と石を基盤にした恵心地のよい迎いで大地のなりたちを享べる「丘のまち郷土学館「美宙」」。日中でも星を観測できる天文台が併設され、「宇宙の中秋の美瑛」を体験できる。

解説してくれたのは、同推進協議会事務局次長で上富良野町ジオパーク推進室長の中村有吾（なかむら ゆうご）さんだ。「丘の地形を生んだ大噴火は約280万年前、約200万年前、約120万年前の少なくとも3回ありました。その火砕流が堆積し、雨風による浸食を受けた結果、波打つような丘の地形が生まれたのです。この大噴火で「十勝カルデラ」ができたと考えられています。でも今、そんなカルデラ地形はどこにも見当たりませんよね。十勝岳、美瑛岳、富良野岳などの新しい火山の噴火によって埋められて消えたのです」。



地球環境学の博士号をもつ中村さん。

大噴火の火砕流は、町の景観にも生きている。美瑛駅や道の駅びえい「丘のくら」の建材として利用されている美瑛軟石だ。「美瑛軟石は、十勝カルデラから噴出した火砕流堆積物が固まってできた岩石（溶結凝灰岩）です」と、中村さん。北国の空に映えるすがすがしい白い美瑛軟石は、太古の大噴火でこの地にもたらされたのだ。



美瑛軟石が使われた美瑛駅。富良野線の開業は早く、明治32年（1899年）のことだった。駅舎は昭和27年（1952年）に竣工。

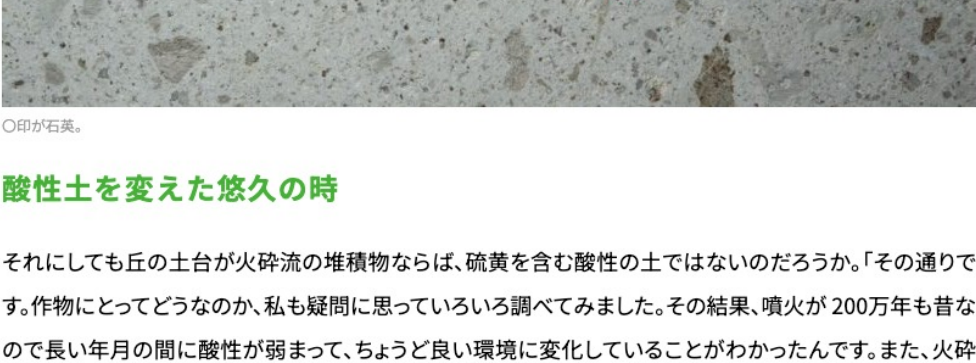


美瑛駅。

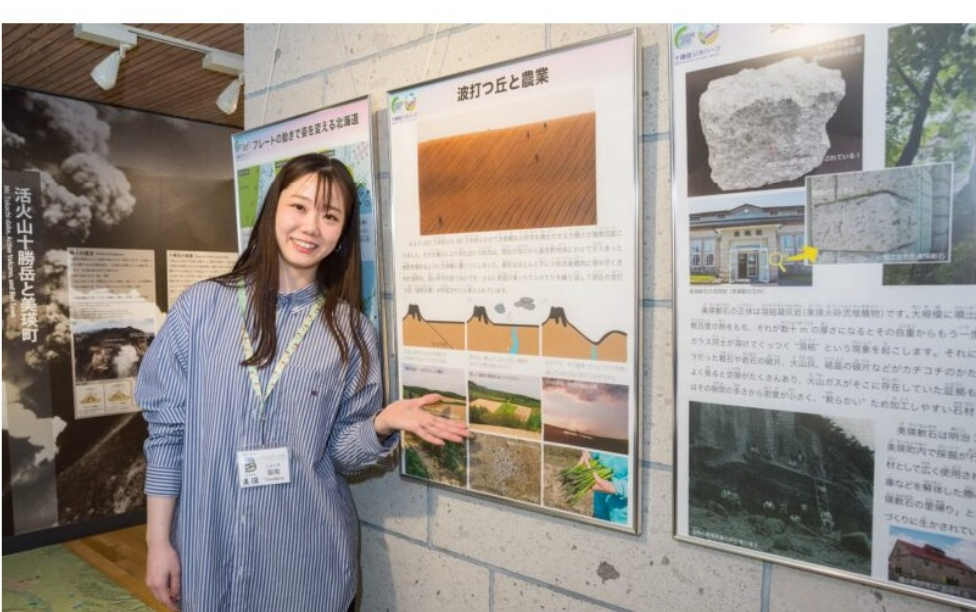
「丘のまち郷土学館「美宙」の外壁・内壁も美瑛軟石だ。十勝岳ジオパーク専門員の富島千晴（とみじま はる）さんが指さした先が、キラキラしている。「きらめいてるでしょう。美瑛軟石には石英が入っているんですよ」。白い地肌にクリスタルを散りばめたようだ。



「丘のまち郷土学館「美宙」の壁材に使われている美瑛軟石を説明してくれる富島さん。



美瑛軟石の壁材。



〇印が石英。

酸性土を変えた悠久の時

それにしても丘の土台が火砕流の堆積物ならば、硫黄を含む酸性の土ではないのだろうか。「その通りです。作物にとってどうかの、私も疑問に思っている調べてみました。その結果、噴火が200万年も昔なので長い年月の間に酸性が弱まって、ちょうど良い環境に変化していることがわかったんです。また、火砕流にはさまざまな大きさの火山灰や礫（れき）が入っているため、水はけのバランスも良いようです」と、富島さんが答えてくれた。それは悠久の時間からの贈り物と言えるかもしれない。



富島さんは火山地質学と鉱石学が専門。富島さんが簡単に取材し取り上げた「美瑛（びえい）と麓（ふもと）」を見れば、地域の作物がさらにおいしく育ちあがりそうに思われる。

ビールの原料であるホップも、丘の地形と冷涼な気候を好んだ。サッポロビールの前身・大日本麦酒（だい にっぽんビール）（株）が道内各地で試験栽培した結果、上富良野村がホップの生育に最適だったのだ。泥流被害の翌年、泥流を免れたところに苗が植えられた。同社の用地取得を仲介したのは、復興に尽力した上富良野村の吉田良次郎村長だった。



現在、道内では上富良野のみでホップが大規模に生産されている。写真提供＝サッポロビール

富良野といえばランペダーだが、その始まりは昭和23年（1948年）、上富良野町で曾田（そだ）香料（株）が栽培を始めた。ランペダーも水はけの良さを好んだ。美瑛・富良野エリアでは、地形や地質の特性を見極めて農業が展開されている。



上富良野町は観光資源としての「ランペダー＝発祥の地」を謳っている。上富良野町の日の出公園ランペダー園にて。写真は7月上旬、写真提供＝十勝岳ジオパーク推進協議会事務局

十勝岳ジオパーク推進協議会事務局次長で学芸員の荒明慎久（あらあけのりひさ）さんは、ある有名な足跡も教えてくれた。それは江戸時代に蝦夷地を踏査した松浦武四郎（まつうら たけしろう）だ。「現在の新栄（しんえい）の丘のあたりから十勝岳連峰をスケッチしていました。それまで知られていなかった十勝岳連峰の姿を克明に描いているんですよ。季節は早春。雪に覆われた荘厳な山々に、武四郎の躍ったに違いない。



松浦武四郎が描いた寛政5年（1858年）3月の十勝岳連峰を写す荒明さん「丘のまち郷土学館「美宙」」に展示。



メツカクシ火口。ここから北西1kmほどの山麓で約200年前の噴火の足跡が見つかっている。写真提供＝十勝岳ジオパーク推進協議会事務局

【後編】では、美瑛町の市街地から十勝岳に向かって進んでみよう。

INFORMATION

丘のまち郷土学館「美宙」

住所	美瑛町美町4丁目1-1 Google Map
電話番号	0166-74-6116
開館時間	10:00～18:00（天文台は10:30から。入館は17:30まで）
休館日	火曜（祝日の場合はその翌平日）、年末年始（12月31日～1月5日）、その他休館する日が月に1日あります。
入館料	無料（天文台は町外の高校生以上200円）
アクセス	美瑛駅から徒歩約6分
関連リンク	https://www.town.biei.hokkaido.jp/culture/misora/

※情報は取材時のものです。最新情報は各公式サイト等をご確認ください。

この記事の
《前編》を読む
2026.06.01公開

この記事の
《後編》を読む
2026.07.13公開予定

北海道ヒストリア 記事一覧はこちら

この記事シェアする

